



# 平成24年度 富山市民 感謝と誓いの つどい

とき 平成24年8月1日(水) 午後1時30分  
ところ 富山国際会議場 メインホール

主催／富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会・富山市

- |              |                |               |
|--------------|----------------|---------------|
| 富山市自治振興連絡協議会 | 富山市社会福祉協議会     | 富山市遺族会        |
| 富山市老人クラブ連合会  | 富山市民生委員児童委員協議会 | 富山市児童クラブ連絡協議会 |
| 富山市婦人会       | 富山市母親クラブ連絡協議会  | 富山市PTA連絡協議会   |
| 富山市小学校長会     | 富山市中学校長会       |               |

### 中学生作文最優秀賞

## 「つながる富山」

富山市立北部中学校三年生 吉野 紗久良

約六十数年前の富山大空襲。ここ富山は焼け野原になりました。多数の死者が出て、生存者も心に大きな傷を負いました。年月を経た今の富山。山と海に囲まれた自然に恵まれた地形で、街中は美しい建築物が立ち並び、今日の住み良い豊かな富山があります。

修学旅行で関西を訪れましたが、都会にはない良さや美しさが富山にはあると思います。私はふと、こんなに美しい富山があるのは誰のおかげだろうと思いました。数十年前の焼け野原を立て直してくれたのは一体誰なんだろう。

私の胸に浮かんだ答え。先人のおかげ。心身共に傷を負った富山の人々が

前向きに頑張ってくれたおかげです。もし、今の私の前に同様に焼け野原が表れたとしても、復讐できるような努力しようなんて思わない、思えない。多分、自分の事で精一杯だ。

心の強い先人が立て直してくれたおかげで今の富山がある。だから私たちが現代人は過去の人々全てに感謝しないといけないのではないのでしょうか。明日を素晴らしいものになりたいと、苦しい日々を乗り越え努力してくれた人々に。

東北の人々は今、富山の先人と同じ状況にたたされています。三一一、東日本大震災。故郷が、大事なものがたくさん失われた悪夢。しかし、現実

に負けない位の強い心を持って復興に向けて頑張っておられます。きっと、後世の方は感謝でいっぱいだと思います。

私は、ありがとうと思う事は大切だと思います。しかし、感謝の心をもつだけでなく、私達にも何かできる事はないでしょうか。私は、明日の富山が今日の富山より少しでも成長できるようにサポートする事を誓います。

未来の富山が発展できるように陰ながら努力する事。それは、先人の思いを受け継ぐ事にもつながり、同時に感謝の気持ちを示す事にもつながるのでないでしょうか。

後世の人たちが感謝してくれるような行動をし、故郷が好きな富山市民になりたいと思います。

### 小学生絵画最優秀賞

三・四年生の部



「あつたらしいな! ゆめの学校」  
富山市立三郷小学校 3年1組 飯澤 せつなさんの作品

五・六年生の部



「未来は明るい」  
富山市立太田小学校 5年1組 田近 菜摘さんの作品

### 富山市のあゆみ展

■日時・場所  
7月30日(月) 午前10時～午後6時  
7月31日(火) 午前9時～午後6時  
8月1日(水) 午前9時～午後4時  
富山国際会議場 1F交流ギャラリー

■内容  
富山市の歴史の紹介や、市民生活の変遷を写真等のパネルで展示するほか、小学生が描く絵画「未来の富山市」も展示します。

このプログラムは再生紙を使用しています。

## 「池の中に避難」

富山市四方荒屋 川西 あつ子

「じゃ、気を付けて帰られ」。母の言葉が終わるか終わらないうちに、突然「ウーウーウー」とけたたましいサイレンの音が、病院中に聞こえて来た。看護婦さんたちが「空襲警報発令——」と病院中に叫び回っている。

私より七つ年下の弟が二十年の四月ころから日赤病院へ入院し、お盆には退院できるという矢先の八月二夜の出来事であった。弟は三歳、私は小学校五年生、母は三十五歳だった。田んぼ仕事を終えた母が病院に着いたころは真っ暗だった。母と交代した私は家に帰ろうとしていた。

B 29の爆撃の音や焼夷弾を投下するすさまじい音響の中で、私は母にしがみついて泣き叫んでいた。母は「早く逃げよう」と言つて弟をひたたくるようにベッドから抱き起こし、私の手をちぎれるくらいに引っぱった。どこをどう逃げ回ったかわからないが、行き着いた所は病院の中庭だった。そこには池があり、とっさに母はそこに入り私も引きずり込んだ。焼夷弾が真っ赤に染まった空を、きらきらと光りながら、物すごい速さで地上に落ち、「ドーン」と音をたてて爆発した。心臓が止まるかと思うくらい地面が鳴った。死ぬかと思った。

焼夷弾の熱気で池の中の水が暖かくなってきた。

母は弟を私に抱かせ何度も病室へ行つては、両手に持てるだけの物を運んで来ては池の中へ放り込み水を吸わせた。病院はまたたくまに燃えあがり、二面火の海となった。池の中の私は身体中が熱くなつたが、水の中に漬けた訳の分からない衣類が頭からたたきつける様に身体をぬらしてくれた。私の右手の内側にその時の火傷の跡が五十年へた今もその時の証のようにうすく残っている。

あたりが静かになり燃えるものはすべて燃えつくし、東の空が少しづつ白みかけてきた。池の中に入って約八時間。ふとわれに返り、池の中を見ると、たくさん破片が浮いていて、その中に二匹の大蛙が白い腹をみせて死んでいた。池の中の水が熱くて耐えきれなかったのだろうか。しかし、私たちは助かった。

あたりを見回すと、病院はもろろんのこと家々はみな焼け、富山北口あたりまでが一望できる位になっていた。そうした中で、電気ビルと県庁だけが外観をとどめていて、何とも異様な感じがした。母は池の中に沈んでいたオシメを拾い上げ、何枚も重ねて靴代わりにぐるぐるすると三人の足に巻きつけた。

松川ぞいには、川へ避難して来て焼夷弾の直撃を受けたのだろうか、真っ黒になった焼死体があるところと重なっている。男か女かの区別もつかない。

私たち三人の姿があまりに哀れにみえたのかもれない。おにぎりや乾パンを差し出し「助かって良かったね」「これを食べて元気出され」と、名も告げずに声をかけてくれた人もいた。私たちはむさぼるようにそれらをほおばった。地獄で仏に会うとはこういうことだと思った。

何時間歩いただろう。村が見え、家が見えてきた。昨夜の出来事がウソのように思えて仕方なかった。家では祖母や姉妹たちが「母ちゃんたちが帰ってきた」と言つてワァッと歓声を上げ抱き合つた。私たちを探しに病院へ行き、精根つきで帰つて来た父は私たちの顔を見るなりおいおいと大きな声で泣いた。私はその時生まれて初めて父の涙を見た。父四十歳の時である。

今はその父も母も、そして弟もいない。弟は終戦の直後に高熱を出し何度か峠を越しながらも病には勝てず二十三年二月に五歳で他界した。健在ならば五十四歳。良いパパになっていただろうにと思つたとあの戦争が憎く、悔やまれてならない。



氷見市島尾海岸に漂着した富山空襲の犠牲者を供養するため、現地に建立された慰霊像

# 式典

## 1. 富山市の紹介映像

## 2. 「<sup>とわ</sup>永久の火」入場 奉持者 富山市立杉原中学校生徒

## 3. 国歌斉唱

## 4. 黙とう

## 5. あいさつ 富山市長 森 雅志

## 6. 朗読 「私の戦争体験記」から 「池の中に避難」／川西 あつ子 朗読／声のライブラリー友の会 馬淵 明美

## 7. 代表献花及び一般献花

## 8. 「永久の火」昇天